

あとがき

今回はパリの若い画家ジャン=シャルル・ブレJean=Charles Blais(1956~)の最新作20点余を展示し、ご覧に入れるもので、わが国では初めてのブレの個展である。カタログのテキストは難波英夫さん(西武美術館)にお願いし「ジャン=シャルル・ブレ展によせて」と題する論稿をお寄せいただいた。一読して大変明晰なブレ論で、ご寄稿いただいたことを大変うれしく思っている。ブレについてはこのテキストをお読みいただければ充分であるが、ブレと私の出逢いのことなど若干申し述べておきたいと思う。

1985年1月22日、私はパリのブレのアトリエで初めて彼に逢い、そこで彼の作品を2点求めた。それがブレと私の最初の出逢いである。

その年の冬はヨーロッパに猛烈な大寒波が襲い、新聞は各地で凍死者続出と報じていた。1月20日から29日まで、商用でパリ、ベルリンを訪れるることにしていたので、出発前に厚手の毛糸の長靴下や、耳までかぶさる毛糸の帽子などを新宿のデパートで買い求めたのを記憶している。ところが、機中のアナウンスでパリの気温は摂氏4度まであるというし、朝、シャルル・ドゴール空港に着くと雨が降っている。寒気団は昨日去ったというのである。いささか拍子抜けした思いをしたが、一方ではホッとしたものである。

出発前にフォス夫人と連絡し、フランスの若い作家の仕事をみることが出来ればうれしいと依頼していたが、運よくパリに着いた翌日の午前中、その機会に恵まれた。フォス夫人とフランスの美術評論家P氏が3人の若い作家のアトリエに私を案内して下さった。

その日は陰うつなる鉛色の空のもと、冷い雨が降っていた。最初に案内されてタクシーを降りたところはキュリー研究所の跡だという廃屋に近い古ぼけたビルであった。年内にはとりこわされる予定だという。暖房とは名ばかりの小さなヒーターしかない吹きさらしに近い部屋がアトリエに使われており、まことに荒涼たる風景であった。そこで、二人の若い作家が仕事をしていた。そのうちの一人がブレであった。

コンクリートの倉庫の一室に、ポスターが積んであった。もっともポスターと言っても普通の小さなペラペラのポスターではなく、地下鉄の駅の構内などにはてある大きなポスターで、それも幾回も糊ではり合わせ重ねられた部厚いポスター

をはがしたポスターの断片なのである。ブレはこの幾重にもはり合せられたポスターの断片を素材に画いている。いずれも不規則、不定形なのである。

そこに画かれているものはすべて人間である。人間の全体と部分がモチーフなのである。輪郭の線は太く、人間は肥大化して画かれ、頭部はないかもしくは埋没している。前景は著しく拡大され、遠景は逆に著しく縮小されている。小さな作品は人体の部分が大きく拡大されて画かれているので、小品といえども作品から遠く離れてみると体が画いてあるかよく分らないのである。

私は奇妙な混乱に陥ったのである。ブレ自身は細身のヒヨロリとした小柄なからだつきで、もの静かで、目は遠くの方をみているような青年である。しかし、その作家の画いたものはシリーズで、一方ユーモアがあり、原始的な力を感じさせる。荒ぶる魂に出逢った感じで私は興奮したのである。そこで二点作品を彼から求めた。その年の3月の第七回現代人物肖像展にピタリだと思ったのである。

その後、私はパリに行くたびにブレの新しい明るいアトリエを訪ね、彼から作品を求めた。昨年(1987年)1月の第八回現代人物肖像画展にも彼の作品を展示するとともに、この展覧会の案内状には彼の作品を使用した。彼のドローイングにはコラージュがなされている場合があるが、これがなかなか的確でうまいのである。1985年5~6月、西武美術館で開催されたフランス現代美術展には7名の作家が選ばれていたが、ブレもそのなかの一人で、彼の横長の大きな作品が展覧会場の正面入口の壁面に展示されていた。この展覧会をご覧になった方はきっとこの作品をご記憶であろうと思う。

さて、ブレは当画廊の彼の個展のために来日し、オープニングパーティに出席の予定である。この展覧会が美術関係者にどのように評価されるか面白いところである。ブレのわが国での滞在が快いものであることを希うとともに、今後一層のご健闘を祈るものである。

1988年9月11日

佐谷画廊

佐谷和彦